

MfG_J_Sculpture_of_Takeishi_Kouzaburou_in_Niigata

近隣の武石弘三郎作のブロンズ像、大理石像

東京美術学校彫塑科の一期生で、日本の彫塑界の草分けのひとりでもある武石弘三郎は、長岡市長呂（旧中之島）に生まれ、戦前に百体以上のブロンズ像を製作しましたが、その大半が第二次世界大戦の戦時金属供出により失われました。しかし幸いなことに、戦後にも少数ですが製作され、そしていくつかの復元像も製作され、県内のあちこちに、見ることができます。また、戦時金属供出により弘三郎作はありませんが、別の作像作家によるブロンズ像も、県内にいくつかあります。これらを、まとめてみました。

尚、「友情の双像」については、別ファイル「堀口久萬一と「友情の双像」武石貞松の教育のリレー」として掲げております。併せてお読みいただけたらと思います。

MfG_J_Person_in_Nagaoka_Horiguchi_Kumaichi_and_Takeishi_Teishou.pdf

1. 近隣の武石弘三郎作のブロンズ像、大理石像
2. 西園寺公望に関わる武石弘三郎作品と、戊辰、明治初期の関連する人物
県内に現存する像は、ずいぶんと、あります。もっとあります。
星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」について
成瀬仁蔵首像の逸話
3. オリジナル写真集
4. 作品探訪の目標地図
弥彦公園の久須美東馬像、中之島長呂・若宮社の友情の双像、

参考 田中後次

彫金・鑄造作家であります、唯一ともいえる作像です。

参考 悠久山に新しい銅像と令終会碑

参考 久須美家と住雲園

参考文献

- 1) 佐々木善朗、「彫塑家 武石弘三郎ノート」、北日本美術(1985)
- 2) 松本和男、「堀口大學 研究資料集成・別冊」 私家版(2007)
河井克己、「＜友情の双像＞ 堀口九萬一と武石貞松 」
- 3) 佐藤正二 「腕は確かなり・彫塑家 武石弘三郎の生涯」、
新潟日報2014 日刊に連載
- 4) 河井克己、「武石弘三郎製作の肖像銅像を訪ねて」、
月下vol14(2013)

金属供出像の像主(モデル)の、弘三郎以外の作者の作像

長谷川泰像 峰村さん新作 新組・北越戊辰伝承館前

弘三郎作は東京湯島、戦時金属供出

山田又七像 田中後次の作 悠久山・堅正寺脇

弘三郎作は旧宝田石油本社前、戦時金属供出

1. 近隣の武石弘三郎作のブロンズ像、大理石像 191205春日

(全てでは、ありません)

堀口九萬一、武石貞松	中之島・長呂の若宮社参道脇「友情の双像」
星野嘉保子（復元像）	草生津・唯敬寺本堂前
田村文四郎（オリジナル縮小像）	悠久山・堅正寺脇（オリジナルは北越製紙内）
久須美秀三郎	越後線小島谷駅前
久須美東馬	弥彦公園内 瓢箪池の傍
池原康造（復元像）	新潟市・新潟大学医学部池原記念館前
竹山屯（大理石像）	新潟市・新潟大学医歯学部付属図書館三階
新津恒吉（復元像）	新潟市・りゅーとぴあ入口前
狛犬（本人による再製作）	中之島・若宮社（初代の狛犬は戦時供出）
老母	県立近代美術館所蔵(お嬢さんから寄贈)
今井藤七（本人による縮小像）	県立近代美術館所蔵
裸婦像レリーフ（大理石像）	県立近代美術館所蔵

武石弘三郎(1877年-1963年)の関連年譜

1901年(明治34年) 彫塑科卒業。その後、ベルギーに8年間滞在し、その間にブリュセル国立美術学校に学んだ。

1909年(明治42年) 帰国。同郷の石黒忠恵の知遇を得、その関係で松本順・石黒忠恵(ただのり 陸軍軍医)像や森鷗外像の制作を手がけた。

1919年(大正8年) 内藤久寛像を製作(日本石油設立者のひとり。石地出身) 田村文四郎像の製作は、その後と思われます。

1920年(大正9年) 山田又七像を製作

1920年(大正9年) 石黒忠恵像を製作

1926年(大正15年) 竹山屯像を製作

1926年(大正15年) 今井藤七像を製作(北海道の老舗百貨店 丸井今井の創業者、三条出身)

木彫彫刻には手を出さず、もっぱら大きなブロンズ像を注文に応じて製作していたため、大半が屋外に展示されていて、人々の目についたこともあったでしょうが、戦前の、百体を越すと云われる作品の殆どが、戦時金属供出により失われています。

そのため、武石弘三郎の名は、東京美術学校彫塑科の一期卒業で、日本最初期の塑像作家でありながら、余り知られていないのが、残念です。県内には、戦後、気を取りなおして郷土の人々に懇願されて作像したブロンズ像が随所にあり、また復元像も数体ありまして、弘三郎ファンとして、たいへん嬉しい限りです。

留学から帰国後の初期の代表的作品に、大正4年(1915)の大倉喜八郎像があります。昨年、大倉集古館改装に伴い、ブロンズ像の周囲もリニューアルされたそうですが、私が、この巨大な喜八郎像を見たのは、今から二十年以上前で、そのころは、作者の武石弘三郎の名も知りませんでした。

作成当時の喜八郎の『今までに最も感動した場面の、中国借款契約書を手に、庭の大樹の下に据えた椅子に腰をかけた私を表現してほしい』とのエピソードが、若山三郎さんの小説「政商 大倉財閥を創った男」の中に書かれています。(学研文庫版のp344-346)

2. 西園寺公望に関わる武石弘三郎作品と、戊辰、明治初期の関連する人物

▲ オリジナルは戦時金属供出で消滅

堀口久萬一
武石貞松
像

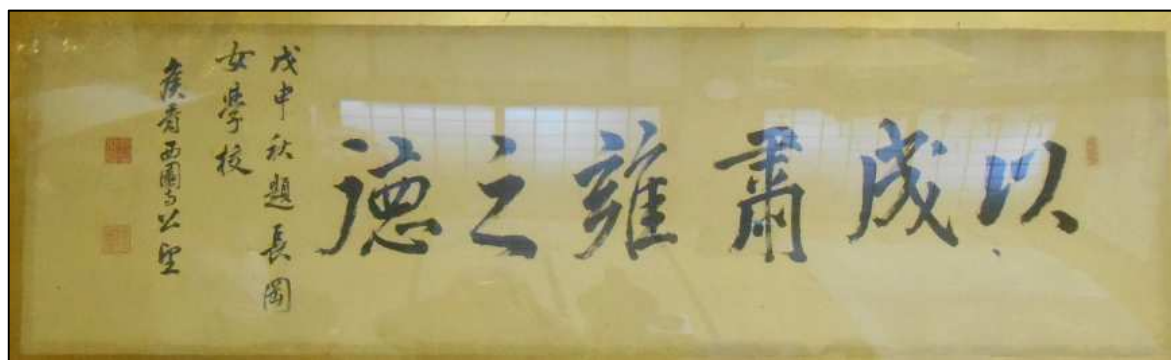
山縣有朋
高橋竹之介

▲
西園寺公望
像

竹山屯
像

▲
長谷川泰
像

三島億二郎
河井継之助



▲
星野嘉保子
像

星野嘉保子碑
拓本
以成肅雍之德



星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」について(2016年11月 春日正利)

2017年10月改訂

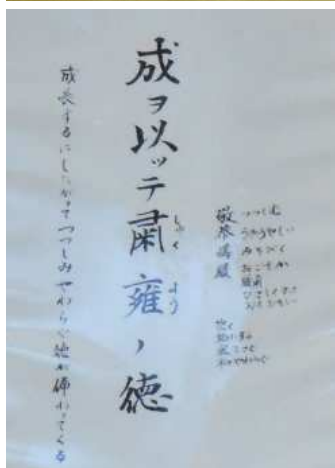
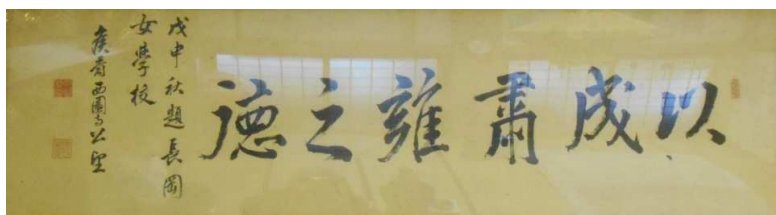
「長岡歴史事典」には、「以成肅雍之徳」 せいしゆくをもってとくのまもりとなす、つつしみ深く穏やかな徳(恵み)の人である、という意味とされていますが、実際に西園寺公望が揮毫した扁額が、星野家菩提寺、草生津の唯敬寺本堂にあり、その扁額脇に掲げられている添書きの説明は、これと少し異なります。

本堂で拝見した扁額添え書きのご説明にある「成るを以って、肅雍の徳」の、「成長するにしたがって、つつしみやわらぐ徳が備わってくる」、という解釈は、この扁額が、学校で毎日生徒達が仰ぎ見る講堂に掲げられていたとの三条住職のお話と考え合わせると、なるほど、そう受け取るべき、とも感じます。

しかし、事典の説明のように、当時のご住職様が、日ごろの熱心なご門徒であった嘉保子さんの遺徳を偲んで、「つつしみ深いおこころのなかに、慈悲をたれるお方であった、という、嘉保子先生の優れた徳を讃えるようなことを書いてほしい」と、公望さんをお願いし、それに対して、「では、以前に書いた講堂の扁額の読み方を変えてみては」、と言ったという受け取り方もあるように思います。

阿弥陀様に深く帰依した先生ですから、この徳は、先生が日ごろ詠まれたであろう親鸞様の和讃の恩徳讃の「恩徳」、「仏の恩徳」であり、つつしみ深いおこころのなかに慈悲心を示される、というようなことではないかと、拝察しております。

(春日の私見)



西園寺公望揮毫の
唯敬寺様本堂扁額と
扁額添え書き



石碑の碑文

揮毫の年の戊申は明治41年(1908年)と思われます
星野嘉保子歿後4年たっております。

銅像が建立されたのは大正十二年(1923)、
記念の石碑が建立されたのは昭和十一年(1936)とされています。

西園寺公望筆



西園寺公望が明治十四年秋保子刀自の養嗣子野勝氏に書きたるもの

さいおんじきんもち

西園寺公望

嘉永3年～昭和15年11月 91歳没
明治・大正の政界の大元老、能書家
立命館大学創設

せい も しゆくよう とく
読み：成ヲ以ッテ肅雍ノ徳

訳：成長するにしたがってつつしみ和らぐ
徳が備わってくる

戊申（明治41年）秋書 ～西園寺公望59歳の時～

目良 卓 先生 訳
（工学院大学付属高等学校教諭）

成瀬仁蔵首像の逸話

武石弘三郎は、女子教育に関連した人物として、星野嘉保子、西園寺公望の作像をしました。
その女子教育のつながりで、成瀬仁蔵像も製作しています。

<http://blogs.yahoo.co.jp/tatugaya100/41201773.html>



武石弘三郎は、日本女子大学では、「成瀬仁蔵首像」の制作者・三井高修を指導した彫刻家として知られている。

一般的には、武石弘三郎は、「森鷗外胸像」(T9)、「森鷗外浮彫」(T12、焼失)の制作者として知られているといえよう。

三井高修制作の「成瀬仁蔵首像」は、光太郎による「成瀬仁蔵胸像」がなかなか出来上らない中、成瀬仁蔵の没後10年にあたる昭和4年、軽井沢三泉寮、大もみの樹の下に安置され、除幕された。

除幕式には、武石弘三郎も出席し、話もし(写真)、「家庭週報」には、「彫刻製作に就いての一家言」という談が掲載されている(998号)。

「私は成瀬先生とは、方面は違って居りましたが、五六度以上もお目にかかる機会をもちました。又娘が附属高等女学校の出身であるという関係から、従ってお目にかかる機会を与えられた事もあります」

武石の娘には、長女・萬里子、次女・帰東子がいる。

武石は、東京美術学校の塑像科のただ一人の第一回卒業生である。

明治29年9月、武石(20歳)は東京美術学校に入学、明治30年、本科の彫刻科(木彫)に進級、明治32年、彫刻科の中に塑像科が新設され、初代教授として長沼守敬が就任した。

武石は、この塑像科の最初のただ一人の生徒であった。

高村光太郎は、このとき、木彫科の一年後輩であり、一对一の塑像科の授業を羨ましく思ったりしたという。

明治34年、武石は東京美術学校を卒業し、ベルギーに留学し、西洋の彫塑を学ぶことになる。

<http://blogs.yahoo.co.jp/umenosuke1949/32733366.html>

高村光太郎は大正8年、日本女子大学の創立者・成瀬仁蔵の死の直前、胸像の制作を依頼された。試作は色々試みられたが、納得の得られるものがなかなか出来あがらない中(昭和8年によく完成)、昭和4年(成瀬の没後10年)、三井高修が「成瀬仁蔵首像」(ブロンズ像)を制作し、軽井沢・三泉寮の大もみの樹の下で除幕式が行われた。

三井の実業家として歩み始めた三井高修は、理工系の人で、趣味が多彩、無類のカーマニアでもあったが、欧米視察中、彫像制作に興味をもち、帰国後、彫刻家・武石弘三郎(光太郎の先輩)の指導を受けていた。東京小石川の本邸内に独立した彫刻制作用のスタジオ棟の設計を建築家・松田軍平に依頼したほどであった(設計図が現存)。

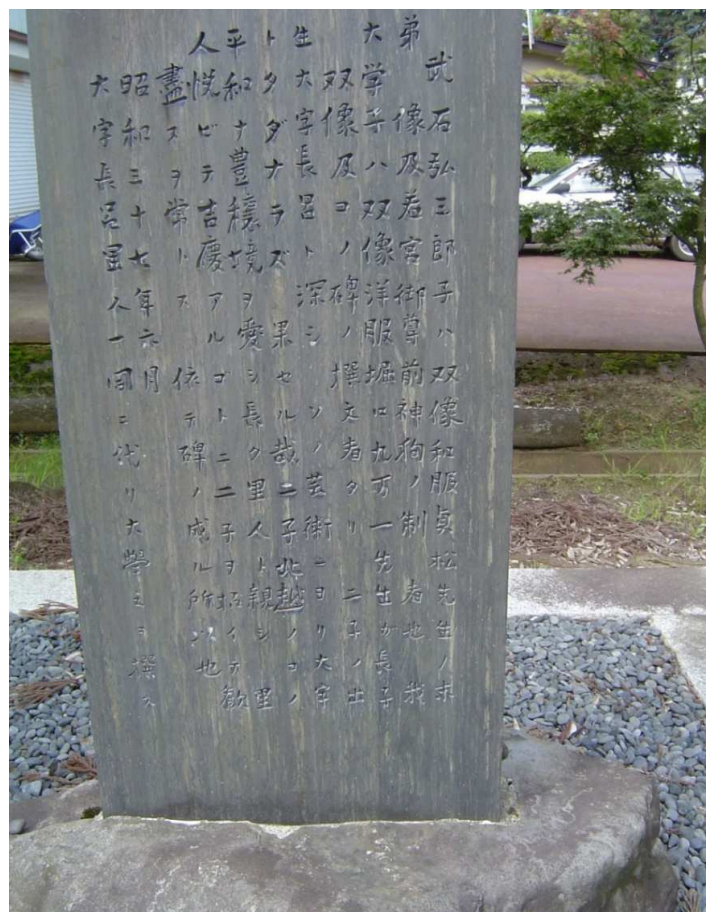
三井高修は少年時代、父・三郎助のところに出入りしていた成瀬仁蔵の薫陶を受けたこともあり、温顔で若々しい「成瀬首像」を制作した。

一方、同年、画才のある廣子夫人は、写真家・小川一真が撮影した成瀬の肖像写真などを参考にしながら、「成瀬仁蔵小肖像画」(象牙円板に描画)を制作し、夫妻で成瀬仁蔵像を競作した。

軽井沢での除幕式当日、中央ブロンズ像の前の蝶タイが高修、右2人目の洋装婦人が井上秀(のちの卒業生初の校長)、左3人目が武石弘三郎(写真は成瀬記念館所蔵)。

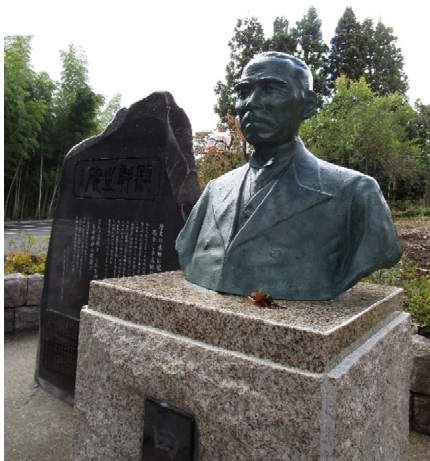


中之島・長呂の「友情の双像」



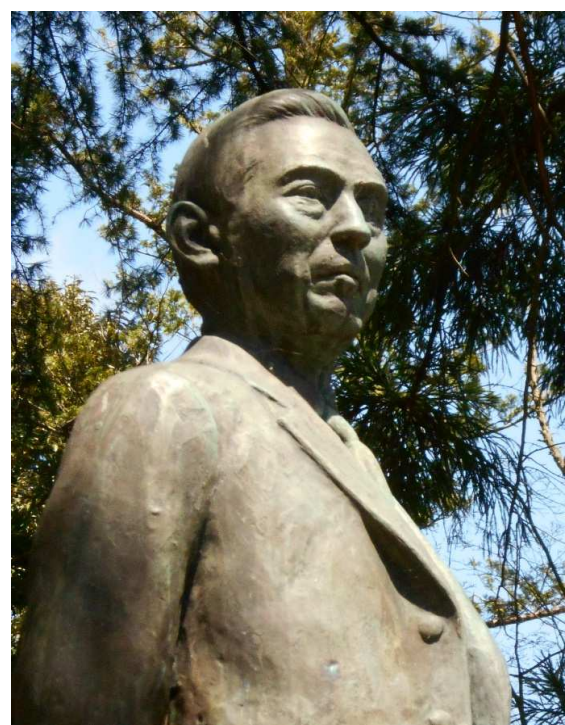
友情の双像
碑文

詳しくは、「友情の双像」の堀口久萬一と武石貞松の教育のリレーの資料を参照下さい。

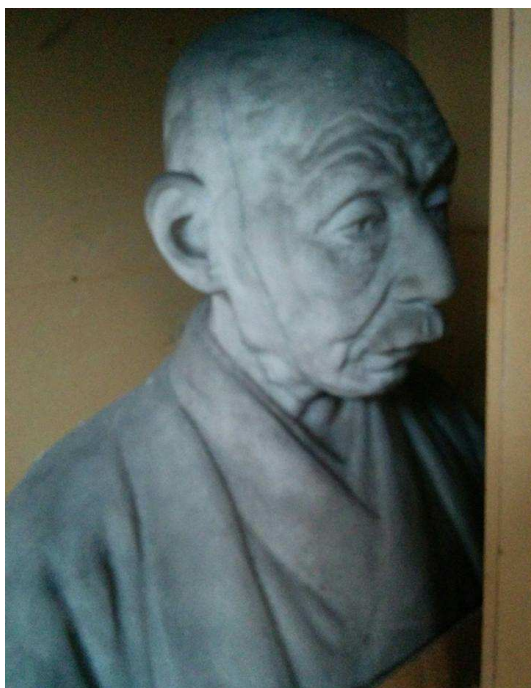


若宮社 狛犬	裸婦像
田村文四郎像 (縮小像)	星野嘉保子像 (復元像)

久須美父子



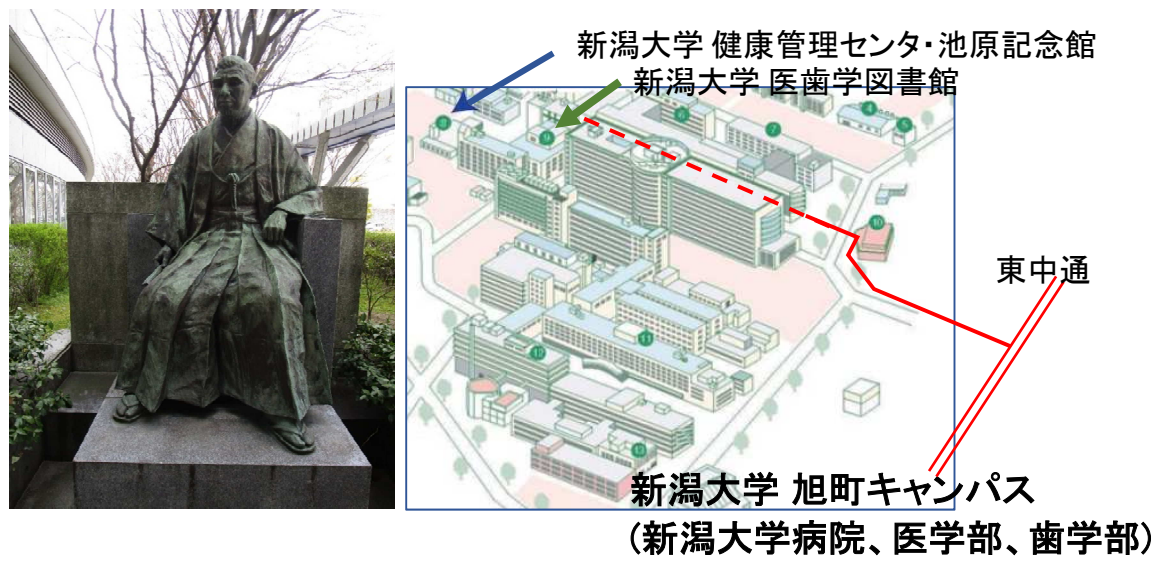
住雲園 (長岡市小島谷)	久須美秀三郎像 (長岡市小島谷)
久須美東馬像 (弥彦公園内)	久須美東馬像 (同左 近影)



北越戊辰伝承館・前庭の
長谷川泰は、吉田、栗生津の
長善館を向いています。
顕彰像建立の発起人プレート
には、ノーベル医学賞受賞前の
大村智先生の名も、刻されて
います。

竹山屯像	山田又七像 (田中後次の作)
長谷川泰像 (峰村哲也の作)	池原康造蔵

新潟市白山公園近くに、三体の像



新津恒吉像 りゅーとぴあ・入口	新潟大学 旭町キャンパス
竹山屯像のある 新大医歯学図書館	池原康造像のある 健康管理センタ・池原記念館

三つの像が、
近くにありますが、

上の旭町キャンパス図は、外来棟、病棟の位置が少し間違っていますが、
医歯学図書館、健康管理センタ・池原記念館へは、東中通から
医師会館の小路を登って、赤い線、点線を歩くと、近いです。

4. 作品探訪の目標地図

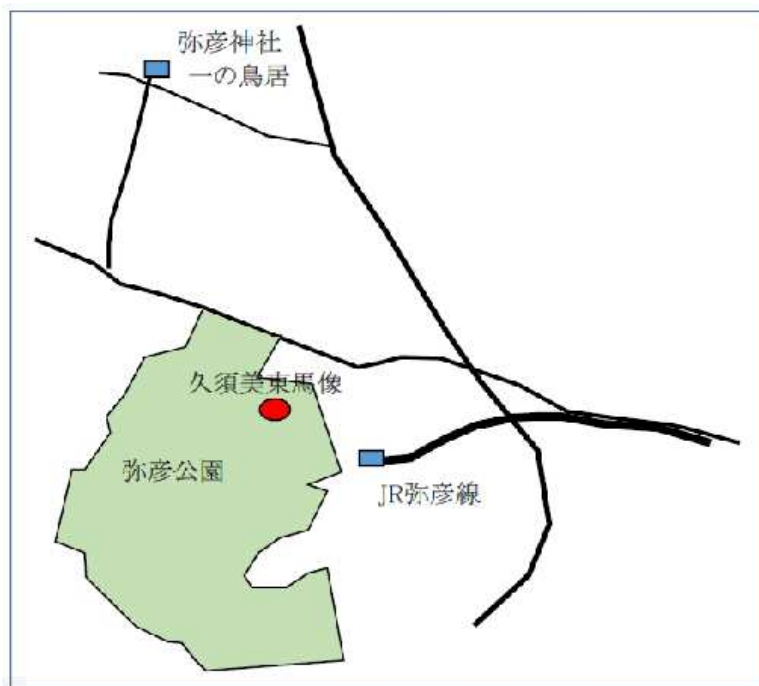
弥彦公園の「久須美東馬」像

中之島長呂・若宮社の堀口久萬一・武石貞松「友情の双像」像

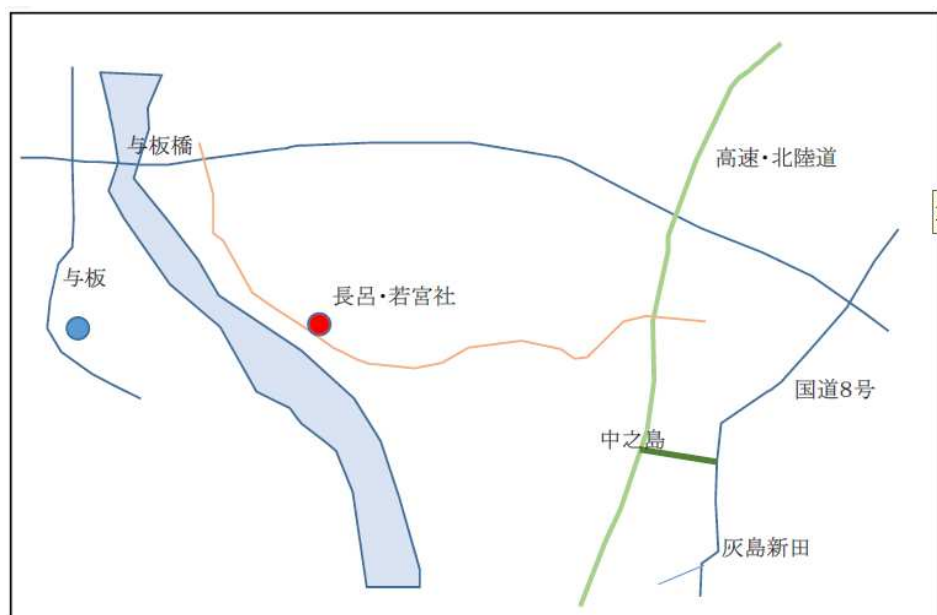
新潟市、新潟大学旭町キャンパス内

「池原康造」像、「竹山屯」像

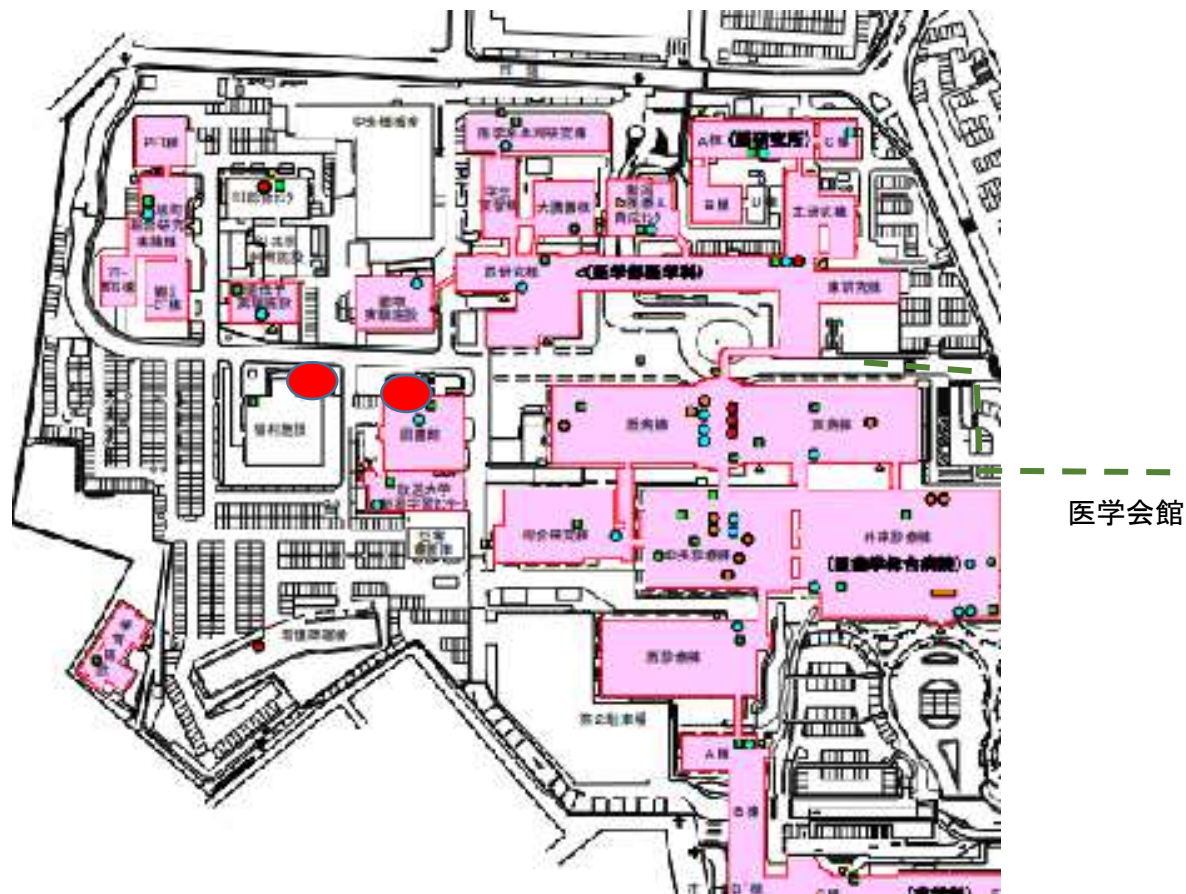
(1) 弥彦公園の「久須美東馬」像



(2) 中之島長呂・若宮社の堀口久萬一・武石貞松「友情の双像」像

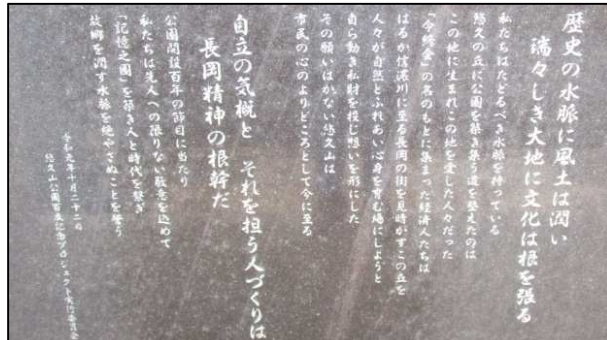


(3) 新潟市、新潟大学旭町キャンパス内
「池原康造」像、「竹山屯」像



3. 新しい令終会碑「記憶之園」碑と、その心

(1) 堅正寺脇の碑と碑文



堅正寺脇の碑

同 碑文

碑文

歴史の水脈に風土は潤い

瑞々しき大地に文化は根を張る

私たちはたどるべき水脈を持っている

悠久の丘に公園を築き集う道を整えたのは

この地に生まれこの地を愛した人々だった

「令終会」の名のもとに集まった経済人たちは

はるか信濃川に至る長岡の街を見晴るかすこの丘を

人々が自然とふれあい心身を育む場にしようと

自ら動き私財を投じ想いを形にした

その願いはかない悠久山は

市民の心のよりどころとして今に至る

自立の気概と それを担う人づくりは

長岡精神の根幹だ

公園開設百年の節目に当たり

私たちは先人への限りない敬意を込めて

「記憶之園」を築き人と時代を繋ぎ

故郷を潤す水脈を絶やさぬことを誓う

令和元年十月二十二日

悠久山公園百歳記念プロジェクト実行委員会

(2) 作像者について

山田又七像は、山田又七社長就任祝いに社員が贈呈したもので、永らく山田又七邸にあったものです。

作者は長岡藩士族の二男として生まれ、東京美術学校鑄金科を卒業の田中後次です。1899年(明治32年)美校助教授時代に、山田又七像を製作しました。後次は、昭和初年に、悠久山蒼紫神社参道脇の小林虎三郎碑、渡辺廉吉碑も作成しています。

田村文四郎像は、今も北越CORP社内にある武石弘三郎作の銅像を、3D計測機で精密に測定し、一緒に設置される山田又七像の大きさと釣り合うよう、弘三郎作の縮小像として製作されたそうです。

武石弘三郎も山田又七像を製作していますが、戦時金属供出で現存しません。田中後次の山田又七像のほうが、製作時期は早いということになります。

田中後次、武石弘三郎のふたりは、1908年の頃、出張、留学中で、ともにヨーロッパにいたのも、奇縁です。

後次の専門とする鑄金でブロンズ像は作れるだろうが、そもそも彫像のような複雑な造形は専門ではないと思います。しかも、国内で、日本人による制作は多くなかったはずで、苦労が多かったのではないかと考えています。

ちなみに、日本の銅像としては、

日本初の西洋式銅像は、1880年(明治12年)、兼六園の明治紀念之標
(日本武尊の銅像)、製作は高岡の鑄造師

西南の役で戦没した石川県出身の政府軍兵士400余名の慰霊のため建立
東京最古の西洋式銅像は、1893年(明治26年)靖國神社建立の
大村益次郎像、大熊氏廣製作

悠久山に新しい銅像

(1) 蒼紫神社と堅正寺しかなかった御山に、大きな公園を作り上げた令終会の中心人物の山田又七と田村文四郎の像と、その令終会の活動を示した碑文が、一番ふさわしいところに設置されたと思います。悠久山ガイドに必須の説明ポイントができ、これで蒼紫神社、桜山の二つの石碑と合せて三つになり、二時間コースでは苦しくなりました。山田又七像は田中後次製作、田村文四郎は武石弘三郎製作です。これにより、長岡市、新潟市周辺で見ることができる弘三郎による像・モニュメントが、10体を越えました。

山田又七、田村文四郎が加わった意義は大きく、ストーリーが膨らみます。これらを数時間で周るのは無理なので、弘三郎作品に、他の塑像家の製作像などを加えて、「悠久山の長岡復興・令終会」とともに、堀口大學と周辺の人々を中心とした「長岡の文学・美術のモニュメント」、「石油関連を中心とした新潟の明治大正期の産業」、そして「新潟の医学と功労者の銅像」など、いくつかの観光プレゼンとしてまとめたいと思っています。

(2) 田村文四郎像、山田又七像の製作時期について

田中後次の山田又七像のほうか、武石弘三郎の山田又七像より早く製作されている。田中後次、武石弘三郎のふたりは、1908年の頃、出張、留学中で、ともにヨーロッパにいたのも、奇縁である。

1890年(明治23年) 鑄金科卒業

1899年(明治32年) 美校助教授時代に、山田又七像を製作

1908年(明治41年) 欧米に出張

(3) 彫塑家としての田中後次

後次の専門とする鑄金でブロンズ像は作れるだろうが、そもそも彫像のような複雑な造形は専門ではないと思う。しかも、国内で、日本人による制作は多くなかったはずで、苦労が多かったのではないか。

ちなみに、日本の銅像としては、

日本初の西洋式銅像は、1880年(明治12年)、兼六園の明治紀念之標
(日本武尊の銅像)、製作は高岡の鑄造師

西南の役で戦没した石川県出身の政府軍兵士400余名の慰霊のため建立
東京最古の西洋式銅像は、1893年(明治26年)靖國神社建立の
大村益次郎像、大熊氏廣製作

久須美家と住雲園

久須美秀三郎 くすみ-ひでさぶろう

1850－1928 明治-大正時代の実業家、政治家。

嘉永(かえい)3年3月15日生まれ。明治13年新潟県会議員。

日本石油、北越鉄道の創立にかかわる。

越佐新聞発行所長、越後(えちご)鉄道社長をつとめた。

35年衆議院議員(当選2回、憲政本党)。

昭和3年1月18日死去。79歳。越後(新潟県)出身。

<http://bizumo.blog95.fc2.com/blog-entry-101.html>

先日、住雲園に行ってきました。

ここは、新潟県長岡市(旧三島郡和島村地域)の素封家旧久須美家の庭園です。

このお屋敷の主であった久須美秀三郎と久須美東馬の父子は、私財を投じて越後鉄道株式会社(現在のJR越後線／柏崎～白山び弥彦、越後長沢間の鉄道)設立したことで知られています。

邸宅及び庭園は、昭和に入り大阪の貿易商池田直吉(長岡市出身)によって買い取られましたが、昭和47年、池田直吉はこの邸宅及び庭園を長岡市に寄贈しました。

その後、長岡市より和島村に譲渡されましたが、合併により、再び長岡市の管理下に置かれることとなりました。

現在は、近所の方たちがボランティアで庭の手入れなどをされているそうです。

<http://www.niigata-nippo.co.jp/blog/railway/2015/06/041838.html>

JR越後線「小島谷(おじまや)」の駅前に久須美秀三郎(くすみ・ひでさぶろう)氏の銅像がある。「越後の鉄道王」として語られる人だ。

秀三郎氏は久須美家の27代目。先祖は鎌倉時代にさかのぼる。

初代は、あの仇討ち物語の曾我十郎と伝えられる。

第五郎とともに、父のかたき工藤祐経(すけつね)を討った人物とされる。

久須美家は代々、代官を務めてきた。

幕末、1850(嘉永3)年に生まれた秀三郎氏は

県議会議員、衆議院議員などを務め、早くから鉄道の重要性を唱えていた。

1887(明治20)年から北越鉄道(現在のJR信越線)の創設に奔走し、

それが実現すると越後鉄道(JR越後線)の開設に尽力した。

越後鉄道の柏崎―白山間が開業したのは1913(大正2)年。

小島谷の駅も同時に開設された。

秀三郎氏の長男が久須美東馬(とうま)氏。

父とともに新潟県の鉄道整備に力を注いだ。

父子が描いていた壮大な鉄道構想については、また別の機会に。

※参考情報

「住雲園」から徒歩10分ほどのところにレストラン「和島トゥー・ル・モンド」。

(旧島田小学校を改装した建物と料理、パンなどが人気)

越後線を挟んで良寛ゆかりの史跡多数。





久須美秀三郎生誕の地で息子東馬とともに暮らした住雲園と、碑文

<http://www.kenoh.com/2012/04/08fujii.html>

久須美秀三郎、それに秀三郎の子、東馬の越後鉄道建設への貢献

東京と新潟を結ぶ路線は3つのルートのうち直江津延長線を選択

直江津から新潟に延びる路線、つまり東京と新潟を結ぶ路線は、直江津延長線、長野県豊野から信濃川沿いに走る豊野線（現在の飯山線に相当）、そして三国峠を通る現在の上越線が候補に挙がり、その中で直江津延長線が選択された。

この直江津延長線は、柏崎から塚山峠を越えて信濃川を渡り長岡へ、三条、新津を経て新潟に至る計画であり、蒲原平野の信濃川西岸には鉄道が敷設されるものではなかった。政府の財政困窮から、鉄道官営を原則としながらも私設鉄道を許認可の下で認めるというなかばダブルスタンダードになっていた。

この直江津延長線についても「北越鉄道会社」という私設鉄道が敷設することになった（のちに政府が買い上げ国有化）。そこで、刈羽・三島・西蒲原の人々から我が村にも鉄道を挙げた。

日本石油、北越鉄道の創設にかかわった久須美秀三郎が息子東馬とともに越後鉄道敷設に乗り出すことになる。

秀三郎は旧家久須美家の27代目、柏崎県の第二大区副大区長を務めた。

1882年ころから石油事業に力を注ぎ、日本石油の取締役を務め、西山油田噴油後は北越鉄道の設立にも奔走し、取締役も務めた人物である。1902年からは憲政本党の衆議院議員を務めた（当選2回）。

秀三郎が中心となって鉄道敷設運動を展開し、1908年に仮免状が下付されたが、日露戦争後の経済情勢から安田財閥の安田善次郎らの支援を受け、1911年に越後鉄道会社の設立総会が開催された。この越後鉄道に対しては、久須美家だけでなく、新発田出身の大倉財閥を成した大倉喜八郎、前島密、山口達太郎、内藤久寛、白勢春三、鍵富三作ら有力者、さらに第四銀行、六十九銀行、長岡銀行、新潟商業銀行、鍵三銀行、柏崎銀行などの経営陣、日本石油、宝田石油の役員など石油関係者が多く名を連ねた。

久須美秀三郎、それに秀三郎の子、東馬(1877-1947)は、新潟で、あるいは東京で資本家の協力を仰ぎながら、越後鉄道計画を建てたわけだが、実は当時の資本家には鉄道に投資して鉄道営業が芳しくなくても、政府が買い上げてくるという目論見もあったことは否定できない。

久須美父子にそのような目論見があったかどうか、今となっては確認できないが、単に地域発展のためというわけでもなかったのが当時の時代背景である。しかし、久須美父子は私財を投げうって北越鉄道、越後鉄道の設立に尽力したのは間違いないだろう。

越後鉄道は柏崎―白山間を結び、吉田で分岐して弥彦、三条へと鉄道を敷設する計画で1912年開業

越後鉄道は、柏崎から白山まで、吉田で分岐して弥彦、そして三条までの間に鉄道を敷設することになった。現在の弥彦線である参宮線は、あくまでも越後一ノ宮・彌彦神社への参詣客を当て込んだものだった。

弥彦公園に建つ久須美東馬の銅像の全体

当時の鉄道は一大観光地である神社・仏閣への参詣(巡礼)客を見込んだものが多かった。江戸時代の「お伊勢参り」が鉄道に変わっただけである。

1912年、越後鉄道として最初の営業区間である白山と西蒲原郡吉田村の西吉田の間が開業した。当時の白山駅は現在の白山駅の位置にはなかった。新潟市立鏡淵小学校付近が当時の白山駅の位置である。

そして、1913年に柏崎―白山間が開業し、1916年には参宮線・弥彦-西吉田間、西吉田から燕へ、さらに1925年に東三条へ、越後長沢へと延びた。

この参宮線・弥彦駅にほど近い弥彦公園には久須美東馬の銅像が置かれている。これは、約4万坪の弥彦公園を東馬自ら指揮して私財を投じて造園したことからである。経営難の越後鉄道に買収案が浮上、1927年に国有化されるも政治介入が「越後鉄道疑獄」として表面化。

だが、越後鉄道は経営難に苦しみ、政治工作によってたびたび国有化を要請したが容易に実現しなかった。それでも、1927年1月に、水戸鉄道(現在の水郡線)・陸奥鉄道(現在の五能線)・苫小牧軽便鉄道・日高拓殖鉄道(現在の日高線)の4私設鉄道に加えて越後鉄道の買収案が突如、浮上した。

国有化案決定に紛糾したが国会議決を経て越後鉄道を含む5社の国有化が決定、越後鉄道は1927年10月に国有化され、国営鉄道の越後線、弥彦線となった。ただ、この5私鉄の国有化は当初から政治的意図が指摘され、特に越後鉄道については強い政治介入が囁かれていたが、1929年に「越後鉄道疑獄」として表面化し、元文部大臣の小橋一太が収賄容疑で起訴される事態となった。

開業100周年を迎える吉田駅

久須美秀三郎生誕の地で息子東馬とともに暮らした住雲園

国有化によって経営から離れた「越後の鉄道王」とも称される久須美父子は、邸宅「住雲園(じゅううんえん)」＝長岡市小島谷＝に住んでいたが、1929年にはこの屋敷を手放した。この屋敷は久須美家から購入した池田直吉氏が長岡市に寄贈、現在は一般公開されている。

国有化された越後線は、まだ白山から信濃川を渡って新潟駅(現在の新潟駅と異なる位置にあり、代々木ゼミナール新潟校辺りにあった)に乗り入れられなかった。1943年に信越線の貨物支線として関屋と新潟の間に貨物線が敷設されたが、ここに旅客列車が走るのは戦後のこと、1951年だった。

開業100周年を迎える吉田駅

住雲園に近い越後線の小島谷駅には「駅舎と歩んだ集落」とある看板が立つ

最後に付言すると、白新線の「白」は長らく越後線の終点だった白山駅の「白」である。
新潟―新潟間の鉄道は、新新バイパスのように道路と異なり「新新線」ではなかった。

(文・藤井大輔)

参考Web:

第2章 鉄道建設への動き

新潟県:【長岡】ふるさとレポート:その昔 実業家の夢の跡

